



Column

渡辺兵力さんと総研と集落研究

相川 良彦

2005年9月6日、元農業総合研究所（略称：総研）所長・渡辺兵力さんが亡くなった。享年91歳であった。総研所員は大抵、「兵力（ひょうりき）さん」と呼んだ。長身と強靱な体躯は、「兵力」という名がふさわしかった。

1946年に設立された総研は、外地の大学等からの引揚教官の受け皿の性格を持っていた。北京大学にいた兵力さんも、その一人である。

1946～65年にかけて、総研は東大教授併任のカリスマ所長が二代続き、その自由な研究環境のもとで有能な研究員を輩出した。農業が重視され、農政は攻めの時代であった。

1966～79年、総研では中途転入組で、かつ屈指の研究業績をあげた研究員が三代続けて所長に就いた。農政は1969年減反を契機として守勢に転じた。行政需要に応える研究が要請され、研究の自由原則とぶつかった。

兵力さんが所長の1970年代前半は農水省の研究組織再編の転換期にあたり、所内で意見対立が先鋭化した。兵力所長は、行政需要に沿わないと総研の将来が危ういという現実認識のもと、胸襟を開き所員と真っ向から議論した。いわば剛速の、直球投手であった。それだけに議論百出で、酒宴では所長への個人批判も噴出したが、それは兵力さんの鷹揚さを前提にして、奔放で明るかった。他方で、兵力さんは賑やかで、よく喋ったが、他者の個人批判をしなかった。結局、所員多数の意見を考慮して、兵力所長は組織再編に踏み出さなかったが、それにより総研は主体的変革に先手を打つ機会を逸したように思う。

「威張る」「ホラ吹き」等の個人批判は、そ

の素性から派生した。兵力さんは桂小五郎の後に斉藤弥九郎道場師範代となった志士・渡辺昇（大村藩）の孫である。貴族（子爵）の末裔なのである。言動には自ずと剛直さがあった。

ただ、威張るというのは少し違っている。ある時福岡にみえた兵力所長は、支所員をキャバレーに連れて行った。酒宴での兵力さんはエンターテイナーで、よく喋り、注ぎ回る。中央にどっかと座ったのが楠原室長、ウエイトレスが楠原さんを社長さんと呼んで、酌をする。そこで兵力さんが、「僕が所長だあー」と大の字になって駄々をこね、皆を笑わせた。

また、兵力さんは登山家で、第一次南極観測隊に参加した。酒宴で「君らは僕をバカにしているが、山岳仲間からは尊敬されているんだ」とぼやいた。このジョークは、知人の登山家に勤め先をいったら、「渡辺兵力さんのいる研究所か？」と畏敬をこめて問い返されたので、本当であると知った。その後（1980年）、チョモランマ登山の隊長になった。

兵力さんの専門は農業経営学・農村計画論だが、中途から集落研究へ転じた。生態学と構造機能論（社会学）をベースにして集落を理論体系づける斬新な内容であった。また、感覚的には、山頂から集落を眺める山男の視線と超俗性を感じさせるものであった。

それだけに、家々の関係や集落の共同性をベースにおく従来の農村社会学会に受けつけられなかった。だが、その研究の歴史的意義は、次の二点において大きい。一つは、1960年代半ばに登場する「過疎」という公的用語を発案し、それを定義・理論づけて普及させた。二つは、集落を土地保全する機能集団とみて、土地領域により集落を確定する方法を提示した。それが、1970年以降に実施される農水省集落調査、ひいては集落政策に実務的・理論的な根拠を与えたのである。

兵力さんは大勢でさわぐのが好きだったが、一時期、所長として所員と一人で対決した。その毅然とした姿勢に、一人でも先陣を駆ける剣客の血と、国家崩壊を目の辺りにした引揚者の、イデオロギーに惑わされない近代合理主義精神とを見る思いがした。それらが山に登る心情ともつながっていたのだと思う。